

日本語総合演習 A

平野 幸夫（関西学院大学日本語教育センター）

1. 到達目標

日本と中国の緊張が高まり、中国からの留学生が激減する一方で、欧米からの学生が増えて、より多様な価値観を相互理解できるクラス構成になった。このため学生がこれまで以上に複眼的な視点を持ち、自国の生活文化と比較しながら日本の文化や政治社会全般について学べる授業を展開した。具体的にはタブロイド版4ページの「異文化交流新聞」と題した日本語新聞の制作を通じて、書き言葉を使いながら、各自にテーマを提示した。学生が自分の発信したいメッセージを学内外の不特定多数の読み手に理解してもらえるように、表現する文章力の習得を目指した。

2. 授業内容

新聞紙面ごとのテーマは以下の通りにした。

1 面＝「日本の美と生活文化にふれて」

- ・アイスランドからの男子留学生は「陶磁器を通して過去を知る」という動機から大阪市立東洋陶磁美術館で取材。日中韓の交流の歴史と文化の特質を学んだ記事を執筆した。
- ・同じアイスランドからの男子学生は神戸にオープンしたばかりの「アンパンマンこどもミュージアム」を3歳の長女と訪れた時の見聞記を紹介した。
- ・台湾からの女子学生二人は大阪歴史博物館で開催中の「幽霊・妖怪画大全集」展を見学し、それぞれ画家が込めた思いや、動物と人間性の鑑定性についての感想文を記述した。

2 面＝「毎日新聞大阪本社」のニュース現場取材

- ・カナダ、中国、韓国日本からの留学生と日本人アシスタントが自国メディアと比較しながら印象記を執筆した。「インターネットの長所と短所」「信頼性に優れている新聞」「点字毎日、言葉は暗闇を照らす」「見出しには注意が必要」などのタイトル記事で多岐にわたってメディアの現況を分析した。

3 面＝「人生を変えた人と言葉」

- ・12人のクラス全員が各自の人生経験の中から最も自分に影響を与え、人生を変えた人を1人選んでもらい、その人物との詳細な関わりと心の変化を記述した。

4 面＝「大震災から何を学ぶか」

- ・神戸の「人と防災未来センター」での取材を通じて阪神大震災と東日本大震災から何を学び、母国で克服しなければならない課題を米国、韓国、日本人の視点から提示した。「語り継ぐ防災教育の大切さ」「ネットを使った地震防災を」など差し迫った危機にどう対応すべきかをレポートした。

3. 成果と課題

春に授業が始まったばかりの時、留学生らは同じ兵庫県の淡路島を震源とする震度の大きい地震を体験し、改めて防災知識を学ぶ重要性を口にした。新聞作りもやはりそんな現場体験が大事にしたいと考え、今回の授業ではそれぞれの自発性に任せた取材行動を促した。旺盛な知識欲を持った学生らは日本人学生があまり興味を持たないような施設などに積極的に出かけて行った。時には同じ場所に再取材に出向く学生もいた。多様なテーマ設定が学生の好奇心を高めた様子が見受けられ、「異文化交流」の手応えも感じた時も多かった。

ただ、記事執筆にあたっては、アジアの漢字文化圏と欧米からの学生の文章表現はレベルが一定ではなく、添削作業が難航した場面もあった。留学生の選考にあたっては、より厳しく日本語の習熟度を判別する必要があると感じた。

4. 今後に向けて

テーマ設定がどうしても教える側の例示に影響されがちなので、もっと取材機会を増やし、学生同士が時間をかけて討論できれば、それ以降深くそのテーマにアプローチできるようになると思える。今後は取材先やディスカッションの時間を増やしたい。



毎日新聞社を見学する留学生ら